



1月25日 水曜日

時代の山

超高層ビルなどに使われる特殊H形鋼で国内トップシェアを誇る桂スチール(兵庫県姫路市)は、「五輪特需」の追い風を全身に受けて高操業が続く。

「今は業界全体が東京を向いている。(鉄骨を)作っても作っても、どんどん発注が来る」と三木桂吾社長(73)は話す。

主な製造拠点は岡山県内(備前市4カ所、玉野市1カ所)にある。ここ数年、国内最大級の自動溶接装置を自社開発するなど設備投資に約40億円をかけてきた。それでも首都圏の需要に対応しきれないため、備前市内に新工場を建設し、この3月から稼働させる。

昨年は東京・日本橋に営業拠点となる自社ビルを新設し、2020年東京五輪・パリリンピックのメイン会場と

なる新国立競技場で使う鉄骨約2千トンの受注も決まった。来期の年間売り上げは今年より1・5割増の約110億円を見込む。

三木社長は「東京にあんなにオフィスビルが増えて大丈夫だろうか」と不安はあるが、高い需要は五輪の後もまだ続くだろう」とみている。

東京スカイツリーや日本一高いビル・あべのハルクス(大阪)に納入実績がある三木社長は「ポスト五輪」の読みは、業界内の見通しと一致している。

五輪施設の整備、再開発事業が急ピッチで進む都内では、人手不足や資材の高騰から建設業者が受注の抑制や先送りをするケースがあるという。建設業者の手持ち工事が

工事山積みで特需続く

山積みで、新たな事業に手を付けるのが難しい状態だ。例えば、東京に本店を構える電気工事業者の旭電業(本社・岡山市)は五輪関係の工事を5年先まで抱えている。

③ ポスト五輪

このところ、公共工事では応札者のいない入札不調が目立ち、東京都ではその割合が全国平均の約2倍で推移している。オフィスビルの耐震化や高度情報化、高速道路など老朽インフラの整備は五輪特需が一服した後に本格化する

とみられる。そのあたりは地方の現場にも及ぶ。若し職人は賃金の高い東京に流れ、岡山県内では年を追

第1部 膨張都市



上から新国立競技場の模型と工事が進む建設予定地、山梨県の実験線走るリニア中央新幹線車両のイメージ

うごとに人材確保が難しくなっている。近年は人繰りがつかず、工期を延長するマンシヨンも出てきた。「高齢の職人をやりくりして何とかしているが、あと10年もすると現場は回らなくなる」。岡山市内の60代の建設団体関係者はこう漏らす。

建設業は他産業に比べて働き手の高齢化が進んでいる。若者や女性を増やさなければ慢性的な人手不足に陥る可能性が高いが、打開策は容易に見つからない。いきおい、ベトナムやタイなどからの外国人技能実習生に頼らざるを得ない会社も少なくないのが地方の現状だ。

(天津雄一郎)

「意見、感想をお寄せください。〒700-8004、山陽新聞社「L」の時代へ」取材班:メール local@sanyonnews.jp フォクス(0600-8003-8125)

歪みを超えて